人が死ぬわけ

死んだものとのつきあい方

ウガンダ・ジョパドラの場合〈上〉

梅屋　潔

日本学術振興会特別研究員、一橋大学大学院博士課程（社会人類学）、ウガンダ・マケレレ社会研究所準研究員

「人はジュオクなしに死ぬものではない。確かにそれは根強い信念だよ」

ナケチョは、巨体を揺すり、笑って答えた。僕が「ジュオクとは何ですか？」と唐突に訊いたからだった。

窓の外にはサバンナの風景が広がっている。鶏が三羽のひよこを連れて畑を横切るのが見えた。ウガンダ共和国の、ケニア国境に近いトロロ・ディストリクトにある豪邸での出来事である。

彼女はひとしきり笑った後、怪訝（けげん）そうな表情をうっすらとうかべ、「でも……何でそんなこと知ってるの？　いまではジョパドラでも若い人は知らないっていうのに」と付け加えた。ジョパドラは、トロロ・ディストリクトのトロロという町近くに住む人口十万少しの少数民族である。

ジュオクというのは、スーダンからウガンダ、ケニアのニャンザにかけて分布するナイル系の諸民族に共通する「超自然的」な観念である。一般に力とか精霊とか訳されるこの観念は、僕の偏狭な個

雨よけの呪術

ブシア村の人々。飲んでいるのは自家製焼酎ワラギ

滞在したトロロ・ディストリクトのボーダー村

人的常識に照らすと、古くからナイル系、ことにナイロートと呼ばれる民族に共有されていることになっていた。

それだからナケチョの質問は、本や学術論文で読んだ情報が脳に詰め込まれたアフリカ人類学オタクとしては予想もつかなかった質問だった。僕はこちらの動揺を隠すのにかなり努力を要した。一九九七年五月末のことだった。

人は自ずから死なず、ただ殺されるのみ

一般にアフリカの伝統宗教では「自然死を信じない」といわれる。人の病や死にはなにがしかの原因が外在しており、その原因を引き起こすエージェントとして祖先の霊、生きた人の呪い、さまざまな憑依霊などの観念が持ち出される。

病や死の原因への関心は、人類の普遍的な現象だろう。なかには仲間の死に際してなにがしかの儀礼を行うかどうかが動物と人間との差であり、「死」の儀礼の有無をもって「文化」概念に代える研究者もいる。ニホンザルはイモを海水で洗う「文化」は伝達するかもしれないが、仲間の死に際して埋葬などの葬式を行うことはついにはあるまい、というわけだ。

首都カンパラの中心部

アフリカに限らずそうしたヒト社会では、原因を取り除く儀礼も発達している。呪いによって引き起こされる病には病院の治療より呪い返しの儀礼を行うべきで、死者の祟りにはそれを慰撫する儀礼を行わなければならない。こうした見方にたつと、たとえば葬儀は死者の祟りを事前に防ぐ手続きであるともいえる。

日本にいると、遺体を見ることはほとんどないだろうが、さまざまな紛争を経験し、いわゆる感染症も多く、乳幼児も含めて死亡率が著しく高い社会にいる彼らの間では、「死」に対する関心も高まろうというものだ。

もちろん、霊魂の観念が死の直接的な原因として語られることは日本でも珍しいことではない。数多くの生き物が日々生まれたり死んだりするのを目の当たりにする赤道直下のサバンナで、僕は時折考え込んだりしていた。「人は死ぬと景色になる」と言ったのは西江雅之だったっけ、なんて昔読んだ本の一節を思い出したりもした。

そうした観念がここで実際に機能している。知識としては知っていても、実際に目の前で信念に基づいた言説を開陳されて、僕は戸惑ってしまった。

●

ナケチョは、瞼はこちらに向け、表情で僕に答えを促しながら、牛の肝臓をトマトと玉ねぎで煮込んだスープにマトケというふかしたバナナをつけて食べている。求められるままに、僕は自分の受けてきた教育や彼女も属する民族集団についての研究について話すと、次第に僕が何者であるかもわかってもらえたようである。彼女は母や祖母から聞いたジュオクについての豊富なエピソードを真顔で語ってくれた。

アフリカン・タイム

僕は一九九七年三月にウガンダ・エンテベ空港の土を踏んだ。ウガンダで社会人類学の調査に従事するためである。うまくいくという当てはなかった。でも日本にいても情報が手にはいるわけでなし(ウガンダには日本大使館もなく、学術関係の情報も著しく限定されていた)、行ってみてからだと思いきったのは一月ほど前だったろうか。頼りは所属している一橋大学と友好関係を結んでいるマケレレ大学だけである。

ウガンダの大学関係者は概ね協力的かつ好意的であった。ただ、まだ「日本時間」の僕にとっては、いろいろな手続きの時間感覚がつかめていなかった。僕の所属する研究所の某は、調査許可が下りないうちから「いつ日本に帰るんだ、息子よ」「そのときはちっちゃいラジオを買ってきてくれ」。僕にかかわる業務はそっちのけだった。書類やレターを請求するたびに「明日」「来週」「あさって」といった調子。なるほどこれが噂に聞く「アフリカン・タイム」かい、と悪態をつくのもつかの間、次第に焦りがこみあげてくる。

ある日レターを取りに行くと、「まだできていない。明日」という返事に続けて、「自分の母親が危篤で遺体輸送に金がいる。ついては七〇〇ドル貸してはもらえないか、息子よ」。出身の村に埋葬しなければならないのでお金がかかるのはわかったが、断るしかなかった。ウガンダに着いてすぐに知り合ったカラモジョン「族」のマリンガは「そりゃひどい、抗議すべきだ」と言っていた。もっともそのときの僕は、インテリのソシアルワーカーとしての彼の意見という側面よりは、さすがに噂に聞くカラモジョン(カラモジョンは近隣民族の牛を夜陰に紛れて奪うことで有名)、過激だなあとしか思わなかったけれども。ちなみに彼は部屋に合計八本の槍を持っており、うち長い四本は壁、短い四本はマットレスの下に隠しているという。

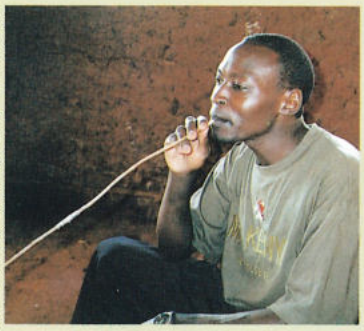
くわしく聞くと、アフリカン・タイムにはそれなりに深い意味がある。というより、その社会に適した感覚なのだ。馴染んでしまえば楽なものである。

ウガンダという国

ガンダ人の国を意味する「ウガンダ」。赤道直下に位置し、スーダン、ケニア、タンザニア、コンゴ、ルワンダ、ブルンジなどに囲まれる内陸国である。国土のほとんどが標高一〇〇〇メートル以上の高地にあるのでさほど暑くはないが、ちょうど蚊とか蝿とかが棲みやすい気候で、マラリアや眠り病が流行しやすく、毎年

ウガンダ・ジョパドラ

醸造酒コンゴ。100%のミレットからつくったものが上等とされる



長いストローでコンゴを吸うバニヤンコレ「族」の青年

かなりの犠牲者が出る。僕がもっとも注意したのもこの手の熱帯病であった。結局はそれにもかかわらず僕もマラリアにはかかってしまったが。

ウガンダには約四〇あまりの言語集団があるが、言語学的には大きく五種類に分けられる。ガンダ、ニョロ、チガ、ギスなどのいわゆるバンツー系。アチョリ、ランゴ、パドラなどのナイロート。かつてはナイル―ハムと呼ばれ現在ではパラナイルと呼ばれることが多くなったカクワ、カラモジョン、テソ、ドドス。そしてレンドゥ、ルグバラ、マディなどスーダン系とそれ以外の少数言語である。僕が調査の中心として選んだパドラ(前述のジョパドラのジョは「彼ら」という意味の接頭辞)は、ナイロートに属する。

スーダン系のほとんどとパドラ以外のナイル系の人々は紛争に悩まされている。現在はカトリック・プロテスタント含めてキリスト教がよく普及している。

一九六二年にブガンダ、ブニョロ、トロ、アンコレの四部族が連合国家としてイギリス保護領から独立し、六六年オボテ首相がムテサ二世を追放して大統領を兼任、翌年王国制を廃止した。この国を有名にしたのは何といっても七一年にクーデターを起こして大統領になった暴政で有名なアミン大統領である。七九年ウガンダ民族解放戦線によって追放された彼の政治が本当に映画ほど酷かったかは知らないが、いまだご健在である。ゆくゆくは帰国の予定も考えている、と新聞の取材に応えていた。現大統領のムセベニは国民に人気があるが、そろそろ歳なのに後継者に恵まれないという人もいる。

酔っぱらい教授とナケチョ

首都カンパラで調査許可を待っている間は手持ちぶさたで、文献をコピーしたり、パドラ出身の人々とつきあったりしていたが、僕が調査を進めるうえで決定的だったのは、ナケチョとの出会いだった。

大学からほど近いバーで昼間からビールを飲んでいた酔っぱらいに紹介され、ウガンダ一の規模を誇るムラゴ病院(かつては東アフリカ一だった)の教授に面会を求めた。

酔っぱらい曰く、「俺の紹介だと言えば、大統領ムセベニでも名門マケレレ大学の副学長(学長は大統領)のセブウフでも喜んで善処してくれるはずだ。彼らは『兄弟』だからな。おまえは俺に会えてラッキーだ」。その日から四回くらい病院の研究室を訪ね、ようやく教授に会うことができた。オウォロ教授といった。専門は病理学。その奥さんがナケチョである(その後その酔っぱらいも病院の教授であることが判明。またこの教授に限らず初対面の挨拶で「おまえは俺に会えてラッキーだ」と言うウガンダ人は多い。謙譲の国から来た身としては少しおもしろかったが、むしろ謙譲の国が特殊例かもな、と思いなおした)。

その後しばらくすると、僕はなぜか知らないうちにトロロ・ディストリクト、ボーダー村のナケチョの屋敷に下宿することになっていた。

マルワの洗礼

この頃、地ビールを初めて飲む機会に恵まれた。ルグバラ出のサイモンに誘われて、カンパラから乗り合いタクシー(ケニアで言うマタトゥをウガンダではタクシーと呼ぶ。日本で言うタクシーはスペシャル・タクシーである)で二〇分、五〇〇シリング(一シリング約〇・一円)。

つまみは豚を焼いたものにアボカドをあえたもの。豪華なものだ。料理はサイモンのおごりだが、ビールは僕もちで、一〇〇〇シリング。瓶詰めのビール一本分である。

やがて出てきた壺をのぞくと、ミレット(シコクビエ)を発酵させた種が入っていて、熱湯を注ぐとグツグツと泡立ってくる。それを植物の繊維でできたストローで吸うのである。ストローの先端には滓をこすために〇・五ミリほどの細い繊維で編んだざるのようなものがついている。ぬかどこのようなにおいがたちこめる。アルコール度数は低いが、吸引するためと長時間にわたる飲酒のせいでかなりこたえた。ひとしきり吸うとストロー

From the World
世界の葬儀式

ウガンダ・ジョバドラ

ナケチョが所属するTOCIDAの本部にて

葬儀で音楽を奏でる人々

母の死を悼んで泣く娘

を別の人にまわすのがマナーである。

地酒をガンダ語で一般にマルワと言い、パドラではミレットからつくる醸造酒コンゴ(隣のテソ人の言葉ではアジョン)、バナナからつくるムウェンゲ、それを蒸留したワラジ(ワラギ)を飲む。飲酒は男女問わず共通の楽しみであり、同じストローをまわしてコンゴのポットを囲むことは友愛の証である。人が生まれたと言っては飲み、客が来たと言っては飲み、人が死んだと言っては飲む。おまえは俺の酒が飲めないのか、といった絡み方も日本並にポピュラーだ。

「昔はブロゴと言ってね」、遠い目をしてガンダの老人は語る。「ストローの飲み口に毒を盛られて病気になったり死んだりした者もいたよ。いやいまでもいると思うよ、わからないだけでね」。

毒の中でも強力なのは自動車のバッテリーの中の液体だという。老人は「たいがい犯人は奥さんだけどね」と、重大な秘密を打ち明けるように続けた。

トロロ入り

五月の末、ナケチョのトヨタに乗せられてトロロに入った。もっともトヨタと書いてあるがメイド・イン・インディアである。坂道で悲鳴を上げてしまう。

首都カンパラを離れるに従って、アンコレ牛と呼ばれる牛の姿が次第に消え、場所によってはバブーン(アヌビスヒヒ)が現れて進路妨害。自動車に替わって自転車の活躍が目立つ。のちに僕のメインの移動手段となるボダ・ボダという自転車タクシーが人々の足である。人を運ぶだけではなくバナナなどの食料や物資を自転車に積んで遠い村まで運搬する。ときにはバブーンに襲われて食料を奪われ、泣きをみることもある。

ボーダー村に着くや、僕らの訪問がおおごとになっていることに気づいた。一緒に自動車に乗ってきたノルウェー人が何者なのか聞きそびれていたが、彼は新型のストーブ(コンロ)を普及するために村に来たからだ。この村では今でも多くの家庭で三つの石を炉にしている。彼の持ってきたブリキのストーブは画期的なモノだったに違いない。すさまじいウルレイション(両掌をかざしてルルルルルル……と叫ぶ。これは歓喜を表す。悲しみを表すときは、ヒーッ、ヒーッと叫ぶか、ときに映画などでよく出てくるインディアンのように口の前に手をあてたり離したりしながらホホホホホホホッと叫ぶ)。彼と一緒にすさまじい歓迎のレセプションに出席し、演劇を観た。

どうもナケチョはTOCIDAという名のNGOの役員らしい。この組織では地域文化の活性化のために三つのプロジェクトを実施している。一つは、ドンキー・プロジェクト。これはロバを飼い、会員に貸し出すことで水くみや薪の運搬などの女性の労働負担を軽減し、教育に割く時間を作れるように貢献するものだ。英語を共通語とするウガンダでは、英語がエレガントに話せないと政治・経済からは排除されてしまう。

もう一つは、有機農法。これは体系的に菜園をデザインすることで従来とは異なる計画的な収穫を得ようとするものである。

三つめに、地域に根ざすアイデンティティを活性化しようとする演劇の上演がある。この劇は、古典的なこの地域での土着のイメージをわざと演じることで、逆に進歩への意欲をかき立てる。一人の男の結婚と父の姉妹からの呪詛(東アフリカ研究の文脈では、目上の者に礼儀を尽くさなかったりする反社会的な行為をする者に対する懲罰の力をもつ呪術)による妻の不妊と病気に始まり、おどろおどろしい呪術師が出てきて、供犠など呪術的な処理によって子供が産まれ大団円で終わる。

この劇を観た後、ナケチョは僕にヤコボという名をくれた。これは梅屋とはどういう意味だと訊かれ苦心して翻訳した結果決まったのだが、ジャックフルーツといううまそうな名前である。

名前が決まったお祝いにビール。激しいウルレイションが村に木霊した。

最初の葬式

村に着いてしばらくし、そろそろヤコボの顔を知らない村人がいなくなった頃のことである。部屋でビールを飲んでいると、村の中でドラムを叩く音がする。助手のオピオとアディンは、「これでまたビールにありつける」とニヤニヤしている。二日前、近くの村で双子が生まれ、ビールと鶏のごちそうに舌鼓を打ったばかりなのだ。生まれるものがあれば死ぬものもあるのが世の習い、と哲学者めいたことを言う。オピオが言うには、長患いの末、村の老婆が死んだのだという。

「八六まで生きたんだから、めでたいことだよ」と、葬式に向かう娘の一人は泣きながら言った。死んだ老婆はこの娘にどんな景色を見せるんだろう。牛の糞を避けながら向かう老婆の屋敷への道行きは、真っ暗だった。天の川の端っこに星が二筋流れていくのが見えた。

埋葬に先だって聖書を読む

死んだものとのつきあい方
ウガンダ・ジョパドラの場合〈下〉
葬式のもつ意味

梅屋　潔
一橋大学大学院博士課程（社会人類学）
ウガンダ・マケレレ社会調査研究所準研究員

死者の顔は口が開いてしまわないよう布で括られていた。傍らでは、蠅がたからないように布で追っている

葬式のはじまり

ドラムの音が大きくなる。死者の屋敷に近づくにつれ、それまでは何の音かわからなかった女たちの叫び声も大きくなる。ヒー、ヒーと言う叫びは死を伝えるためのものだ。これはトウと呼ばれる死の告げである。ルルルルルルッと舌を上顎との間で振動させる喜びのユールレイションとは違うタイプの、もう一つのユールレイション。

死者の屋敷は息子の屋敷に隣接しており、既に「雨よけの儀礼」が施されていた。葬儀の間雨が降らないように、火が焚かれている。マゲンガというらしい。マンゴーと木の芽を割ったものが三つずつ串に刺されて、焚き火の中の直径三〇センチほどの木に立てかけてある。

「これをしておいて雨が降ったことはないのだ」

長老は得意そうだ。

「あれ何かわかる？」と言う老婆の指先を見ると、箕（み）が屋根の軒に吊ってある。

「粉を入れる箕じゃないですか？」

「あれも雨よけの呪術だよ。効くよ」

対面

死者が暮らしていた小屋に、乞われて入った。左手に老婆が横たわっていた。脇には、来るときに一緒だった娘が死者の顔を見詰めて泣いていた。でもあの涙目では多分、顔は見えなかったろう。死者に対して彼女が泣きながら繰り返すジョパドラの言葉は、ウガンダに到着してわずか二カ月の僕には勉強不足で到底わからなかったが、「ママ、なぜ逝ったの」という意味のことを叫んでいるような気がした。

遺体は口が開いてしまわないよう顎を布で吊られていた。枕の傍らには老婆がひとり、遺体に蠅（はえ）がたからないように布

From the World
世界の葬儀式

死者の急須を持つ娘

娘たちはバナナの葉で着飾り、自らが死者の子孫であることを示す

葬儀で音楽を奏でる人々

死者のコップを持つ娘

参列者のなかにも深刻な病に悩まされる者は少なくない

で蠅を追っている。こちらの蠅はしぶというえに、単独行動する日本の蠅と違って、蜜蜂のように団体で来るから常に追っていないとすぐにびっしりたかって、蠅でできた真っ黒い仮面を被ることになる。

この死者の小屋には誰でも入れるわけではない。アニュオラと呼ばれる父方親族、その他の親族以外は、死者と特別の関係にあった人や役人など「偉い人」だ。

アニュオラとは簡単にいうと祖父を同じくする男女である。僕の場合、親族でも役人でもなく偉くも全くないのに招かれたのは珍しいムズングだったからだろう。ムズングとは普通「白人」と訳されるが、実際は日本人[redacted]も含まれる。要するにアフリカ黒人と中国人以外の人を指す言葉なのである。しかし、なぜ中国人が例外なのかは謎である。彼らはチャイナと呼ばれる。

娘たちの葬列。既に死んだ死者の夫たちに妻の死を報告する

通夜

翌日の埋葬が終わるまで、近親者は死者の小屋を囲んで通夜を行う。儀礼執行は、死者の父系親族アニュオラで、参加者は母方親族ネラをはじめ妻の両親、嫁した姉妹や娘夫婦、それらの女性の子供たちである。近親者は地面にござを敷き、座って弔問客を迎える。ござを敷く場所も死者との関係の近さ遠さ、男か女かにより決まっている。あの娘も最後の別れを終えると小屋の外へ出た。

その晩は近隣の人も遅くまで、キワンジェというバナナの葉で葺いた日除けの下で過ごして故人を悼む。

地面にもバナナの葉が敷きつめられており、参列者は思い思いの格好で横になりはじめた。僕は下宿先のTOCIDA本部に引き上げて仮眠をとることにした。夜の底が赤く色づきはじめていた。

悲しい報告

次の日は埋葬。雨よけの呪術の効き目か見事な快晴である。昼になると抜けるような青空の下に、ウガンダ人が大好きなレインボウ・カラーの大きなパラソルがたくさんパッと開いた。

埋葬を待っていると、アニュオラの女性たちが集まり、小屋の入口付近から例のユールレイションをしながら走り出す。ロングドラム、ドラム、見慣れぬ弦楽器(名前は聞きそびれた)、それともう一つこれも名前は知らないが板を撥でカンカン叩く楽器とで構成された楽団のリズムに合わせて踊る。

アニュオラの娘やおばさんや老婆は頭や腰にバナナの葉をつけている。なかには大きな瘤を首からぶら下げた老婆もいる。これはゴイターという内陸部特有の

ウガンダ・ジョバドラ

病気で、海水に含まれる栄養分が不足するために起こる甲状腺肥大である。重そうだ。

アニュオラが巻いている額の鉢巻きは、死者の遺骸の額に三度、自分の額に三度交互に押し付けてから巻くという。

ヒーッ、ヒーッ、ヒイイ。物悲しい叫び声だ。思い思いに行ったり来たりしながら、遠い茂みの向こうに消え、走って戻ってくる。そういった動作を繰り返す。見ると、目的地は一カ所ではない。二カ所目的地があるようだった。手には杖やカップ、水差しなど死者が生前愛用したものを持っている。

行って茂みを覗いてみた。どちらもそれは墓であった。既に死んだ二人の死者の夫の墓だという。アニュオラたちは老婆の死を、その先立った二人の夫に伝えに行っていたのだ。初めの夫のは死者の屋敷の外に、二人目のは隣にある息子の敷地内にあった。きっとこの二人目の夫が、死者の屋敷の隣に大きな家屋敷を構えた死者の息子の父なのだろう。

真っ黒いサングラスをかけ、お洒落なアロハを着た息子は、昼前に首都カンパラからトヨタのランドローバーで駆けつけた。マケレレ大学の教授だという。

「本来は彼もバナナをつけなきゃならないんだよ」

おばあさんが僕にそっと耳打ちをした。彼はなぜかキワンジェ（縁遠い人の場所）の下で踊りを眺めている。だが、目の表情は真っ黒なサングラスのせいで見えなかった。

埋葬

そうこうしている間に、ボーダー村の若者たちの手で、小屋の側に墓穴が掘られた。真っ白い服に身を包んだ神父も到着していた。トロロの街から真っ白な布で覆われた棺桶が届いており、遺骸は小屋の中でその棺桶に納められ、外に引き出されてきた。

死者は公称往年八三歳。息子は一二人。六人は既にこの世にはいない。その中の一人は名門マケレレ大学の農学部教授であることなど、経歴が長老によって紹介され、ミサが執り行われる。全員が起立すると派手なパラソルの林である。

笊（ざる）が回され、豊かな者は大金を、貧しい者はそれなりに出す。日本の香典のようなものだ。これをルオ人は通常ハランベーと呼んでいる。「よいしょ」というかけ声だそうだ。約二八万ウガンダシリングが集まったと発表されると、ホオオッというため息があがった。平均的な労働者の給料がだいたい一日一六〇〇シリングぐらいだから、ものすごい額だ。

さっきとは違うおおぶりの太鼓が打ち鳴らされるなか、遺体が納められた柩は白い布でつられ、穴の中にゆっくりと下ろされた。トタンがかぶせられた柩の上にまず神父が、続いてアニュオラたちが一つまみ、二つまみの土をパラパラと撒き、続いて近隣者が同じことをした。勧められて僕もした。そのとき初めてインテリ息子はサングラスをはずした。

ミサのもよう。通夜からミサ、埋葬まで屋敷内で行われる

有志たちから金が集められる

参列者は近しい者から少しずつ柩に土をかけていく

埋葬した夜と山羊の屠殺

スコップを手にした村の若者数人の手で盛り土がかけられ、遂に柩は見えなくなった。柩が埋まった場所の隣にマットレスが一つ置かれている。アニュオラが交代で死者と最後の夜を共にする。死者を寂しがらせないためだという。

翌朝、ポーリッジが配られた。それはもろこしの粉のおかゆ状の食べ物で、砂糖をたっぷり入れてみると大変うまい。お代わりをしている人もいた。それを飲むとみんな三々五々散っていった。

参列者たちに山羊がふるまわれる

近隣の人にとっての葬式はこれで終わりである。だが、近親者にとっての葬式は続く。夕方、死者の娘の引いてきた茶色い山羊を首を切って殺し、茹でて親戚一同で食べる。いくつかの部分をバナナの皮にくるんで子供に持たせたようだった。部分ごとにもらう権利が決まっているのだろう。内臓は水洗いして絞り、他の部分と一緒にマゲンガの隣に仕立てた即席の竈(かまど)(三つの石を組み合わせて作る)で茹でてみんなで食べた。

この晩まで、アニュオラは水浴びと性交を禁じられる。

ルオの葬式

以上が僕の見た、ある葬式の記録の一部である。次にナイル系の葬式を少し体系的に紹介するために、いくつかの研究に基づいて、ジョパドラと親戚関係にあるルオ人の例を紹介する。

ルオはナイル系の南端でケニアのニャンザという所に住む人々である。ジョパドラとは祖先を共にしている。他の牧畜民と同じく、牧草と水を求めてナイル系の人々は長い旅を続けてきた。ジョパドラは、眠り病を媒介するツェツェバエが多く牧畜に適さないトロロの地に残ったため、牧畜民としての性格を弱め、定住して半農になった。それとは分かれてケニアのビクトリア湖畔に移動しそこに住み着いたのがルオである。

友達の都立大学大学院の椎野若菜氏によると、いくつかの先行研究と観察から言って、一般にルオの葬式は最大で一四の段階に分けられるそうである。死のアナウンス、ブドホという通夜、墓掘り、イコという埋葬、死者のそばでただ座っていることが重要だと言われるケ儀礼、共食する小ブル儀礼、リエド(剃髪)、二度目の共食儀礼であるヤオドホット儀礼、三度目の共食であるテド儀礼、最も大々的な共食会(大ブル儀礼)、服喪の終わりを告げるテロ・チョーラ儀礼、形見分け及び相続に当たるケヨ・ニインニョ、死者を偲んで慰撫するラパール(記念儀礼)、そして既婚女性が死んだときに、彼女の実家の人々が残された家族を慰めるブド儀礼であるという。

ルオの概念——チーラとドーチ

また、埼玉大学の阿部年晴教授の研究では、ルオにとって重要な概念としてチーラとドーチという観念があるそうである。チーラというのは、社会慣習の違反や死者による生きているものへの妬みから起る災いで、ドーチは近親相姦・奇形児の誕生・動物の異常行動などから起こる災いや病気あるいは死をもたらすものだという。

死者の魂にも善悪がある。魂は人が死んだ後も生きつづけ、善良な魂はチュニ・マジャ・グウェスと言い、災いを起こすものはジャチェンと言う。ジャチェンはチーラを引き起こして生きている人間を悩ませる。

いずれにせよ、チーラもドーチも早めに手当てしないと大やけどをする。手遅れになれば死ぬことさえもある。

とはいっても、ケニアのある地域では逆子だって奇形児だというから災いと言われる範囲は広い。

相続その他の問題はあるにせよ、一般的に言って、ルオの葬式は死んだ者の魂をジャチェンにしないため、ジャチェンがチーラを引き起こさないようにするために行われるのである。

葬式のバリエーション

ジョパドラはルオと隣同士の親戚関係にあるので、葬式のやり方も目的も概(おお)ね類似しているが、僕の見た葬式のいくつかは開始時間や儀礼の細部が少し異なっていた。まさか日本のようには個性化は進んではいないし、生きているうちに葬式の計画を立てたりした例も知らない。けれども、僕の目には同じジョパドラの葬式であっても、いくつかは随分違って見えた。

ある理由は経済的なものだし、キリスト教の宗派による違いもあるだろう。ソガやニョレ、テソなど近隣民族の影響もあるかもしれない。

決定的な理由は、まだわからない。きっと送る者の気持ちや態度でいろいろなつきあい方があるんだろう。僕はとりあえずそう納得しておくことにした。

死んだものとのつきあい方

ジョパドラにとって、死んだものがまだ生きているものに見せる景色は多様である。それは単に、今まで共に生きてきたものがいなくなったという状況変化の合理化を意味するだけではない。ジャチェンという新たな不幸を引き起こす、ある種の力への構えでもある。

人はジュオク(前号参照)によって死に、その魂はジャチェンになる可能性を秘める危険な存在である。彼らがこれらの危険な力を畏怖する態度は、日本の黒不浄に対する立場に似ていなくもない。

儀礼の背後に横たわる構造は、極東の島日本でもアフリカのサバンナにも共通しているようである。仲間の死体を放っておくことのできなくなったヒトという動物の宿命なのかもしれない。

ウガンダ・ジョパドラ